

わが署の安全活動

「全員参加のゼロ災害」をめざして

高山営林署 労務厚生係 酒 向 伸 人

1. はじめに

我が署の近年における災害発生状況をみると、表1のとおり昭和55年度及び昭和57年度に無災害を達成しているものの、昭和58年度から平成元年度の7年間においては毎年、災害が発生しています。平成元年度には、5件の災害が発生し、その翌年度には、安全管理重点営林署の指定を受ける不名誉な状況でした。

強度率、度数率からみても、表2のとおりいつ安全管理重点営林署に指定されてもおかしくない状況であり、安全に対する認識、取り組みの不十分さが反省されました。

平成2年度は、過去の安全活動を見直し、現場が一丸となって安全活動に取り組んだ結果、一年間無災害を達成することができました。さらに、平成3年度についても現在無災害を継続中です。

しかし、過去に2年間連続無災害という実績はなく、昭和22年から平成3年度までの45年間に、193件の災害が発生し年平均4.2件の災害が発生しています。

このような状況から、一年間無災害にあまんじることのないよう、さらに無災害日数を延長するため「全員参加のゼロ災害」を目標に、重点項目を設定し取り組んできました。

ここに、安全意識の高揚の一助になればと考え、当署の安全活動の取り組み内容を報告します。

2. 実施内容

(1) 安全衛生委員会の充実

ややもすると安全衛生委員会のための安全活動といった錯覚をいただくようなことでは、決して安全活動とは言えません。委員全員が一体となって災害の無い明るい職場を目指してより充実した安全委員会にするため、会議資料の充実に努めるとともに、先取りの安全活動を行うため、翌月、翌々月の安全活動に対する意見交換を行い、活動をより一層充実したものとしています。

(2) 安全管理担当者会議の開催

毎月1日に安全管理担当者会議を開催し、当月の安全に対する取り組みを話し合い、署としての方向を明確にするとともに、安全衛生委員会の内容が職場のすみずみまで伝わるように、

緑十字の日における徹底事項の意思統一を行い、各班バラバラな指導とならないように工夫しています。

なお、この会議を通して4S運動を推進することを決定し、各班のホウキ・チリトリ・整理箱・1斗缶を利用した灰皿等を備付け、工夫を凝らして休憩所の整理整頓を行い、安全は、身の回りの整理整頓から実践しています。

(3) 300事故通報の有効活用

300事故通報は平成2年度110件報告されていますが、過去には安全衛生委員会に報告されているものの有効に活用されていない面もありました。

貴重な体験であり、災害に対する警鐘であるはずの300事故通報がより有効に活用されるよう、110件の報告を発生月日・発生時間毎に一覧表とし、昨年この時期・この作業ではどんなハッとしたことがあったのか一目で分かるように整理しました。

300事故も公務災害もそのもとは、同じ危険要因であり、どれも情報としての価値に差はないものとし、公務災害速報の分析と同時に身近な300事故通報と対比し、類似災害の防止と危険予知に役立てています。

(4) 「安全だより」の発行による意識の高揚

緑十字の日の話合いで、支局で発行する「山の安全」等の広報紙の外により身近で親しみやすいものではないかといった意見がだされた。署と現場のパイプとして我が署の「安全だより」を発行することとし、月2回の発行を目標に行ってきました。内容は、タイムリーな安全情報、各種研修・会議の伝達、地域の話題等を、節目節目の無災害到達目標に併せて掲載しております。

(5) 作業器具等の改良による安全確保

全員参加でゼロ災害を達成しようという意識の盛り上がりとして、各自が使う作業道具の改良があげられます。

毎日、自分が使う道具を自分の体に合わせて使いやすい、しかも長年の経験からより安全な道具に既製品を改良しようとする意識は安全作業をする上で非常によい結果となっています。

過去の研究発表会において発表した防蜂網の改良や、下刈鎌の改良等がその例で一人ひとりがより安全作業に対して意欲をもって日々作業に取り組んでいるものと確信しています。

(6) 始業時TBMへの安全管理者参加

安全管理組織が一体となってそれぞれの立場から目標であるゼロ災を目指して取り組むよう、毎月の緑十字の日に安全管理者が分担して、各現場の始業時TBMへ参加し、安全の指導、現場からの要望、現場の悩み等を腹をわって話をする中から、意識の高揚を図っております。

また、始業時から管理者が参加することによって、署と現場の一体感も増し好結果を得てい

ます。

(7) ビデオ活用による新KYTの実施

新KYTを実施するようになってから、視聴覚にうったえることとなり、自身の姿、仲間の姿を通しての危険予知というのが大変興味深いものになると同時に、より突っ込んだ討論意見交換ができるようになり、成果をあげています。ビデオの活用は、①場面、状況に応じて画面を静止し、問題点の討論を行うことができること。②自分の姿を見ながらの討論することにより悪い点は素直に反省できること。③掛図では表現できなかった現地の微妙な状況や変化、一連の作業動作がはっきり現れ、対応の間違い等気づかなかった点が、わだかまりなく話し合える等の好結果を生んでいます。また、安全懇談会においても作業基準のテープ、健康ビデオ等を利用しての話題づくりと効果をあげています。

(8) その他

ゼロ災害達成に向けての全員参加の意識の高揚は、毎月の安全目標がより具体的に、しかも実のある目標になりつつあります。タッチ・アンドコールを自主的に実施する班が現れ少しずつではあるが広がりを見せたり、日々のTBMも自分のこととしてとらえ、より中身の濃いものとなってきたこと等徐々に成果が上がっています。

一方、平成2年度全局における請負事業体等の重大災害を分析すると、請負事業体で11件（生産6件・林道1件、治山2件、その他2件）、立木販売で9件の災害が発生しています。本年度も既に11件の災害が発生しています。当署に係わる事業体についても国有林野事業で働く仲間であるという認識に立ち、災害速報を通知し、類似災害の防止、安全意識の高揚に努めています。また関係行政機関と連携を図り、安全指導を行うとともに、安全懇談会・研修会・安全パトロール等を実施しています。

3. 結 果

以上のように、「全員参加のゼロ災害」を目指し安全活動を進めてきた結果、夏山事業では2年間無災害を継続することができ、通算、1年10ヶ月の無災害が達成できました。

職場において誰ひとり、ケガを望んでいる人はいません。安全の確保は、やらされるものでなく、自分自身で守るという意識を持って、一人ひとりが本音で危険と仕事について意見を出し合い、安全と能率は表裏一体であることが認識され、安全活動への意識は今まで以上に高揚してきています。

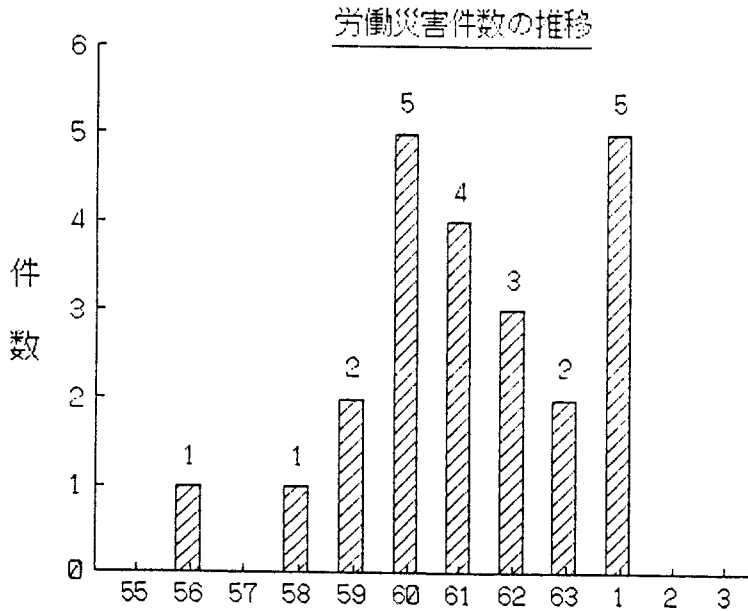
しかし、職場の中にはまだ近道行為や省略行為といった楽をしたいという気持ちがありがちです。

また、新KYT、タッチ・アンド・コール等が完全定着には至っておらず、これから定着に向

けて引き続き取り組んで行きたいと思えます。

「安全に対する取り組みにパーフェクトはない」「安全なしに事業なし」を肝に命じ、今後とも安全で事業が進行するよう、更に取り組みを強化実践して参る所存です。

(表1)



(表2)

